

世界旅打ち気分

●第1回・香港競馬

須田鷹雄



2017年香港カップ、発走直前のゲート裏



香港マイル優勝のビューティージェネレーション
とデレク・リヨン騎手



賑わうハッピーバレー競馬場のパドック

<https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/>

今号より私の連載はガラッと趣旨を変えて、主に海外を対象とした競馬の旅打ちに関するエッセイとして展開させていただくことにした。

海外競馬というと合田直弘さんと内容が重なってしまうのは?と思う方もいらっしゃるだろうが、私は大レースをカバーするとよりはヒラ開催やマイナー場も攻めるほうで、多分に趣味的な旅打ちをしているので重なることはないはずだ。

ただ今回は新装第一回ということもあり、「ちゃんとした競馬」というか、世界を代表する競馬開催のひとつ、香港国際競走(HKIR)を対象に、昨年末のレースと、私の初取材時について書きたい。

2017年のレースでは御存知のこともあり、「ちゃんとした競馬」というても最近はヴァーアーズ以外のレースで外国馬(香港にとって)が優勝する頻度が下がつておる、「香港でも日本でもない馬」の優勝はスプリントだと10年のジエイジエイザジエットプレーンが最後(その前8回は連續して香港馬)、マイルは04年のファイアブレイクが最後。カップも気がつけば10年の

しかし考えてみると当時の日本にはまだマルチやフォーメーションという概念は存在せず、意思疎通ができなかつたのも当然といえば当然だった。

ただこの時、馬券は当たつたのである。香港ボウルはアメリカから来たグレンケイトという馬が勝つてこれは取れなかつたのだが、香港カップは地元のロマネコノティという馬が勝つて、こちらの馬券をしきり取つた。その体験がます自分で香港のリピーターとし、ひいては世界じゅうを旅打ちする」となつていつたのだ。

取材の方はというと、いまのように「プレスもなく、牧歌的」だった。当該週にHKJCのオフィスに行つて取材章を貰つたのだが、いまにして思えばメンバーエリアの入场券と同等でしかないものだつた

あり、それを買えるのは夢のような経験だった。

今までこそ香港のどんなマークカードでも塗りこなせるが、当時は初体験であるうえに英語もいま以上に下手くそ。窓口であってもない「うでもないと説明を受けたがお互いの意思疎通ができず、結局ボックス買いしかできなかつた。しかし考えてみると当時の日本にはまだマルチやフォーメーションという概念は存在せず、意思疎通ができなかつたのも当然といえば当然だった。

ただこの時、馬券は当たつたのである。香港ボウルはアメリカから来たグレンケイトという馬が勝つてこれは取れなかつたのだが、香港カップは地元のロマネコノティという馬が勝つて、こちらの馬券をしきり取つた。その体験がます自分で香港のリピーターとし、ひいては世界じゅうを旅打ちする」となつていつたのだ。

取材の方はというと、いまのように「プレスもなく、牧歌的」だった。当該週にHKJCのオフィスに行つて取材章を貰つたのだが、いまにして思えばメンバーエリアの入场券と同等でしかないものだつた

スノーフエアリーが最後となつていう循環になりつつある。日本もジャパンカップについて「地元馬が強すぎて遠征馬が来ない」というジレンマを抱えているが、似た現象が起きており、全体としてはいかにも勢いのある競馬というムードだ。

今後の課題を探すなら、広州に作つた新調教施設(将来の競馬場化を目指している)が原因でオーストラリアとの二国間協定にひびが入り香港→豪州の輸送ができるなくなつていての解消(ちなみに香港に遠征した日本馬も約半年は豪州に入れない)がまずひとつ。あと馬券の問題点としては、海外レースのサイマル発売がいまひとつ盛り上がりがないことだらうか。しかし大枠としては、まだ発展

その後は大学4年生の暮れだと思つていたのだが、該当する92年12月は国際競走が実施されおらず、記録を見ると93年4月のことだつたよつだ。

当時は香港カップが1800m、後者は日本のホクセイシプレー(92年の阪急杯優勝馬)が出走する」となつた。当時の私は雑誌「競馬王」の編集部に出入りしていたのが、先輩ライターの関口隆哉さんがこの競走を取り材に行くといふことを聞き、お供させていただく」としたのである。

昔のことはよく覚えているもので、泊まったホテルから動いた行程まですべて記憶している。とにかく見るものすべてが初めてなので、興奮し通しだった。

当時なりに興奮したのが、日本には無い種類の馬券が買えたことだ。日本はまだ馬連が導入されて喜んでいた時代。香港には既に3連単(現地では三重彩という)が

ようと思つ。一方で国際検疫廈のガードは緩かつた。いまでは遠征馬の関係者といえども指紋と暗証番号の二重チェックを経ないと入れないが、当時はうろうろしている間にホクセイシプレーの馬房前に到着し、厩務員さんに即席インタビューしたのを覚えている。同じ年の暮れに行われた(93年は4月と12月に国際競走があつた)ナリタチカラ・トモエリージェントのときはそこまで緩くはなかつたが présenceはまだ少なく、レパルスベイのレストランで行われたプレス食事会は、円卓2つ2つの宴会レベルだけだと記憶している。

この香港国際競走については私の10年以上「須田鷹雄と行く香港国際競走ツアー」を実施していくのだが、海外旅行経験が豊富な方ならば、ツアーデなく自力で行つても楽しめる。

観光色の強さで言つなら、夏季のオフを除き基本的には水曜ナイターで行われるハッピーバレー競馬のほうが楽しいかも知れない。市街地からすぐの場所でもある。重要なレースを見たいということになると、その海外旅打ち人生最初の一歩が香港競馬であった。

記憶では大学4年生の暮れだ

しそうな香港競馬である。

さて、その香港競馬だが、実は私の海外旅打ち人生最初の第一歩が香港競馬であった。

その後は大学4年生の暮れだと思つていたのだが、該当する92年12月は国際競走が実施されおらず、記録を見ると93年4月のことだつたよつだ。

当時は香港カップが1800m、後者は日本のホクセイシプレー(92年の阪急杯優勝馬)が出走する」となつた。当時の私は雑誌「競馬王」の編集部に出入りしていたのが、先輩ライターの関口隆哉さんがこの競走を取り材に行くといふことを聞き、お供させていただく」としたのである。

昔のことはよく覚えているもので、泊まったホテルから動いた行程まですべて記憶している。とにかく見るものすべてが初めてなので、興奮し通しだった。

当時なりに興奮したのが、日本には無い種類の馬券が買えたことだ。日本はまだ馬連が導入されて喜んでいた時代。香港には既に3連単(現地では三重彩という)が